



佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方を提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園中学校・高等学校 校長 佐々 信行（さっさ のぶゆき）

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イメージ・プログラム教諭（バージニア州）・ワシントン補習授業校を経て、現職。

日本優勝

サッカーのアジアカップで日本が見事に優勝を果たしました。決勝戦でゴールを決めた李選手は東京生まれの在日韓国人4世で、韓国代表候補にもなったことがあるそうです。日本国籍を取得して日本代表になるまでには、さまざまな悩みやハードルを越えなければならなかったことが容易に想像できます。このような選手が活躍したことは、日本人として大変うれしいことです。おそらく韓国の人たちも喜んでくれていることと思います。それにしても、「国」とは何なのでしょう。

◆ワールドカップとメジャーリーグ

サッカーと言えば、だいぶ前のことになりますが、私たちがアメリカに住んでいたとき、サッカーのワールドカップがありました。

息子はサッカーのチームに属していたので、ワールドカップに関心のある友達がたくさんいました。もちろん、アメリカチームを応援する生徒が多かったのですが、自分が前に住んでいた国や、家族の出身国を応援する人も少なくありませんでした。そのとき日本は出場していませんでしたが、もし「日本対アメ

リカ」の試合があったとしたら、息子はどちらを応援するか悩んだかもしれません。

間もなく、野茂投手がドジャースに入団し、アメリカにいる日本人を沸き立たせました。私たちが住んでいたヴァージニアでも、日系の旅行会社がフィラデルフィアまで野茂選手が出る試合を観戦に行くバスツアーを組んだりしました。しかし、今では日本人選手がメジャーリーグでプレーするのは普通のことになりました。

実力が物を言うプロスポーツの世界では、国境を越えて選手たちが移動するのはごく当たり前のことになってきました。サッカーの強豪クラブチームでは主力のほとんどが外国人というチームもあるようです。スポーツやビジネスの世界では、国境というものがだんだん意味を持たなくなっているのかもしれません。

◆「帰国子女」？

啓明学園には、一年をとおして海外からの「帰国子女」が入学してきます。その中には、親が海外駐在員で、数年間の海外生活の間も日本にいる親戚や友達と親密な連絡があり、日本の情報に絶えず触れていた人たちがいます。このような生徒たちにとっては、日本への移動は確かに「帰国」でしょう。

しかし、海外で生まれた人や、記憶にないほど小さい時にしか日本に住んでいなかった人にとっては、日本は未知の場所です。私たちも、このような生徒に面接をする時には、「日本に帰ったら」ではなく、「日本に移ったら」とか「日本で生活を始めたら」というような言葉を使います。「見かけは日本人、中身はアメリカ人」とお子さんを表現したお母さんがいましたが、その子はまさにそのような感じでした。この生徒が、海外からの生徒を受け入れた経験のない学校に入学していたら、たくさんの誤解や無理解に苦しめられることになったかもしれません。



帰国生の英語の授業（啓明学園）